

映画を楽しみながら，日本語について考える

小林 美恵子

科目名：映画を通して考える日本の社会とことば
 レベル：初級1・2／中級3・4・5／上級6・7・8
 履修者数：25～35名

1. 授業のねらい

日常生活には、教科書で学ぶ日本語とは話体も丁寧度も使用される語彙も異なるさまざまな日本語があふれている。相手や場面に応じたさまざまな日本語のバリエーションが存在する。本授業を受講する学生は、比較的日本語レベルが高く、日常生活における意思疎通という面ではほとんど問題はないが、彼らにとってもこのバリエーションの選択・運用はなかなか容易なことではない。海外にも流通する日本のサブカルチャーから覚えたことばや言い回しをむやみに使い、周囲を鼻白ませるものもいる一方、場面や相手に合わせた丁寧体から普通体への移行にさえ戸惑い悩む学生もいる。

本授業では、現代の日本社会を描いた劇映画を題材として、場面や人間関係と、そこで使われる日本語の話体や語彙などを観察・分析し、さまざまな日本語のバリエーションとその運用の様相を理解する。さらに取捨選択も含め、そのようなバリエーションに対する自らの態度や運用力を身につけ、日本語話者としての見識を養うことをねらいとする。

2. 授業のすすめかた

映画は全編を見ることを原則とし、以下、表1の流れにしたがって、3授業時間を使って1本の映画の鑑賞と分析を行い、15回の授業で5本の映画を扱う。

表1 授業の流れ

| | |
|------|--|
| 1時間目 | 導入（または前時のまとめ）と映画の前半鑑賞 |
| 2時間目 | 映画の後半鑑賞。台本を配布し、ことば観察の着目点を確認のうえ、小レポートを課す。（提出締切はコース@Naviにより、授業と授業の中間日に設定し、提出されたものについては、次時に添削・批評して返却する） |
| 3時間目 | 提出されたレポートにもとづく学生の発表、討論、まとめ |

3. 教材としての映画と授業内容

映画のセリフは現実そのものではなく、役割語的なものであったり、整理もされている。しかし、観客が見て、少なくとも不自然には思わず受け入れられるものとして、日本語のバリエーションの一樣相を示しているとは言えよう。また、できるかぎりそのような映画を教材として取り上げたい。そこで、過去10年くらいの間に作られた、現代の首都圏を舞台とする、特異ではない登場人物・人物関係を描くドラマで、学生にも親しみやすい作品ということで教材を選んでいる。また、学期後半では、「クラスで選んだ映画」として、学生の希望による作品選定も行う。表2に今までに取り上げた作品例と授業の概要を示す。

表2 映画教材と授業概要

| 映画題名 | 監督・発表年など | 授業概要 |
|--|-------------------------|--|
| 晩春 (部分) レイルウェイズ-49歳 で電車の運転士になっ た男の物語 (部分) | 小津安二郎・1949 錦織良成・2010 | オリエンテーション：約70年前の父娘と、現代の父娘の会話場面を鑑賞し、親子間のことばの使い方・特に若い女性のことばの時代による差異を確認し、その変化の社会的要因を考える。 |
| ハッピー・フライト | 矢口史靖・2008 | 職場のことば：航空会社の上司・部下、先輩・後輩、同僚間、接客などでどのような話体、ことばが選ばれているかを観察・分析する。 |
| 歩いて、歩いて | 是枝裕和・2008 | 家庭内のことば：夫婦のことばの世代差、親子間のことば、家庭内の丁寧体決定の要因などを考える。 |
| 告白 | 中島哲也・2010 | 学校のことば：教師のことばのバリエーション、中学生と先生・親、中学生どうしの話体やことばの選択について観察・分析する。 |
| モテキ (クラスで選んだ映画) | 大根仁・2011 | 若者のことば・女性のことば：新語・サブカル用語・IT系のジャーゴンについて、観察・分析する。また、複数の若い女性のことばの比較、『ハッピー・フライト』とは違う業種の職場のことば比較などを行う。 |
| 言の葉の庭 (クラスで選んだ映画) | 新海誠・2013 (アニメーション) | 若者のことば・女性のことば：恋愛関係にある男女のことば、家庭内での兄弟のことばなどを観察・分析する。 |
| 愛と希望の街 | 大島渚・1959 | 60年前のことばと現代のことばを比較する：若い男女間の会話、若い女性のことば、教師のことば、家族間のことばなどについて現代の映画と比較しながら分析する。 |

4. 成果と課題

外国人学習者に限らず、日本人話者も含め「上司には正しく敬語を使って話すべきだ」「女性は女性らしく「わ」「のよ」「かしら」や敬語形式を使いこなすべきだ」という思い込みは現実によってもなかなか是正されず、自由な表現を束縛している面がある。学生たちは、映画で実際のセリフの運用を観察することにより、実はこれらが思い込みにすぎず、きちんと丁寧体で話しさえすれば上司にも敬語はほとんど使われていないことや、いわゆる女性文末形式が若い女性にはほとんど見られないと知り、はじめて現実を振り返り納得する。もちろん、「映画でのことばの使い方は自分のアルバイト先の職場とは全然違う」というような認識をもって討論に加わる学生もいる。このような目で日本語を見ることも、これはこれで一つの成果である。映画、現実、それにこれまで学習し経験した自分の知識を重ねて討論し考えることにより、より深い日本語への認識や運用力が育つものと考えられる。

課題は、文化的視点や言語的な描き方において現代社会を表すような質の高い映画作品を選ぶことにつきる。そのうえで、さらに分析の視野を広げ、視点を深めていきたい。

(こばやし みえこ、早稲田大学日本語教育研究センター)